

特集

「ありのままに今の子どもをみる」

研究所はこれまで、教育行財政上の諸問題や諸課題を、県内外の研究者、教員など多様な市民の協力を得ながら研究をすすめてきて、いくらかの問題提起をなしてきた。しかし、子どもの発達論に基づき、子どもの内面にかかわる研究活動にはなかなか立ち入ることができなかった。

今日、注視されている大津いじめ事件に見る「いじめの深刻さ」、校内暴力、非行、不登校、引きこもりなど、今日ほどが大きな社会的な問題として「子ども」が取り上げられている時代はないといわれている。

その要因は、先号と今号に載せた「国際社会から見た日本の新自由主義教育改革」に説明されている。すでに国連子どもの権利委員会は、十数年前からわが国はとくに過度の競争的な教育環境にあると指摘し、改革を勧告したが、現実には逆に全国学力テストなどさらなる教育の競争をすすめて、子どもへのいつそうの圧力になっている。

親、教師、保育者など直接子どもと接している人たちは、今の子どもをどのように捉え、理解して、ひろく市民と共同して子育て・教育にあたるかが、真剣に問われている。

研究所は、2006年改悪された教基法下の「新しい学校論」を提起し、その際、いかに学校をありのままに見るかを、研究の重要な視点としてきた。

今号では最近の「子どもの状態」をありのまま探ることで、子どもを捉える糸口になると考え、今の子どもの生活をとおして、子どもの姿の一端を明らかにしようとする。

幼児、小学生、中学生の育ちの様子を取材し、(人格)形成途上の子どもをどう捉えるかを考える素材としたつもりである。新津第五中学校の生徒会のいじめ対応の生徒集会などは明るい希望を持たせ得るかもしれない。子どもの姿をより深く考える一助となればありがたい。